

研究 報告

ビワキジラミに対するハンドスプレーを用いた殺虫剤散布による防除法

和歌山県農林水産部 ^{まつ}松 ^{やま}山 ^{なお}尚 ^き生
和歌山県果樹試験場 かき・もも研究所 ^い井 ^{ぐち}口 ^{まさ}雅 ^{ひろ}裕

はじめに

和歌山県のビワ栽培は令和5年産の収穫量が61tで全国8位（農林水産省，2023）である。主産地は海南市と有田郡湯浅町で、ウンシュウミカン生産者の複合経営品目としてビワは大切な収入源となっている。

ビワキジラミは2012年に四国東部で初めて発見され、2014年に新種記録されたビワの新害虫で、2018年に本県でも発生が認められた。本種が発生したビワは、主に幼虫が排出する排泄物（甘露）に糸状菌が発生して激しいすす病となり果実の商品価値が著しく低下することから、被害が問題となっている（図-1）。

本県の露地栽培ビワは1月ごろから幼果が肥大し始め、3～4月に果実の肥大を促進するために摘果された後に袋掛けが行われ、5～6月に収穫される。本種は3月中旬以降発生密度が急激に高まるが、この時期に、果実に生息する本種に対して不十分な防除の後で袋掛けを実施すると袋内に幼虫を閉じ込める形となり被害が進行する（生咲，2020）。したがって、袋掛け前に幼虫を徹底して防除することが大切である。しかし、摘果前は果実同士が込み合っているうえに花殻が付着しているため（図-2）、すき間に潜む幼虫に薬液がかかりにくい（井上，

2020）。このことから、「ビワの新害虫ビワキジラミの対策技術 標準作業手順書」（農研機構，2023）では動力噴霧機による散布を前提に「摘果を行った後にジノテフラン水溶剤を散布し、薬液が乾いたら速やかに袋掛けをする」ように推奨している。しかし、ビワは樹高が5～8mに達するため、樹高が高い園地が多い本県では、高所での作業となる摘果と袋掛けを別々に実施すると効率が悪い。このため、上記の作業手順どおりに生産者が取り組むことが困難で、3～4月に動力噴霧機による殺虫剤散布を行った後、果房ごとに摘果と袋掛けを同時に行っている。摘果前の込み合った状態の果実に散布すること、また高い位置に着生した果実に対して地上から散布することにより、薬液の付着ムラが大きく、防除効果が



図-2 摘果前のビワ幼果（左）とすき間に生息する幼虫（右）



図-1 ビワキジラミとその被害（左：幼虫，中央：成虫，右：すす症状による被害果実）

Applying Insecticides with Hand-held Sprayer at the Time of Loquat Fruit Bagging against Loquat Psyllid, *Cacopsylla biwa* Inoue.
By Naoki MATSUYAMA and Masahiro IGUCHI

（キーワード：ビワキジラミ，ビワ，ハンドスプレー，防除，薬剤散布）